

# Works of Japanese Juvenile Art at the Time of the Pacific War(25) : Articles from the Shokokumin Shimbun(13)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 熊木, 哲 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6165">https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6165</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 「戦時下における児童文化」について(その二五)

―「少国民新聞」(東日版)における読者投稿作品の位相と展開(一三)―

熊 木 哲

【キーワード】 戦時下、児童文化、少国民新聞、短歌、昭和十七年

本稿では、「少国民新聞」に掲載された、昭和十七年の「短歌」を四半期毎に検討する。

引用に際しては、原則として、旧字体を新字体に改めた。

作者については、在籍校名・在学年・性別を記すにとどめ、適宜、府県名を補った。在学年次のうち「高一」「高二」は高等科一年、二年を示す。

### 一 昭和十七年の「短歌」作品の展開

昭和十七年の検討対象は、一月一日(木・第一六四二号)から十二月三十日(水・第一九五一号)までの、三〇九日分であるが、国会図書館蔵「少国民新聞」は、二月二十日(金・第一六八五号)、五月七日(木・第一七四九号)、五月三十一日(日・第一七七〇号)、十二月十九日(土・第一九四二号)のマイクロフィルムが「欠」であり、検討対象は三〇五日分。

昭和十七年の発行状態は、毎週月曜日が休刊日であり、新聞社間の

「戦時下における児童文化」について(その二五)

取り決めによる休刊日(四月四日、九月二十五日)と年末の十二月三十一日が休刊であった。

作品の掲載状況は、火曜日から日曜日まで、「綴方」「詩」「短歌」「俳句」「書方」「図画」の総てか、或いは、その一部が掲載されていた。

「少国民新聞」に改題された昭和十六年には、前身の「東日小学生新聞」では設定されていた「紙上作品展覧会」あるいは「紙上作品展」の紙面構成は見られなかったが、十七年五月十三日(水・第一七五四号)から「私達の作品室」が設定された。

「私達の作品室」は、原則として、水・金・日の週三回設定されたが、八月二十九日から九月二日までの四日間連続で設定されたこともあり、設定上の基準は見られないことになる。

紙面構成は、前年(十六年)の十月九日から週一回(木)、十一月五日から週二回(水・金)、十二月九日からは週三回(火・木・土)が二面構成となり、十七年も同様に、原則として、二面構成が週三回(火・木・土)、四面構成が週二回(水・金)であったが、金曜日の二

面構成が三月二十日、六月十二日、七月十七日・三十一日、八月二十一日、十月十六日の六日分あった。

日曜日は、四面と八面が交互に設定されていたが、十一月八日(日)は六面となり、以後、日曜日は四面と六面構成となり、十七年の八面構成は十月二十五日が最後となった。

二面構成では、十六年には十五日分で全ての作品掲載は無かったが、十七年では七十日分で無かった。

なお、国会図書館蔵「少國民新聞」マイクロフィルムには、十七年五月十六日・二十一日・二十三日・二十四日・二十六日・二十八日・二十九日・三十日、六月四日分で一版と二版が収録されていたが、一版と二版で掲載作品が異なる場合に掲載作品数として集計した。

「短歌」の掲載では、五月二十一日の一版では二作品が掲載されていたが、二版では一作品となり、五月二十八日では一・二版とも一作品の掲載であったが、二版では作品が入れ替えられていた。五月三十日では、一版に二作品掲載されていたが、二版では二作品とも掲載されていなかった。つまり、二十一日では二作品、二十八日は入れ替えを含めて二作品、三十日は二作品とした。

昭和十七年、「短歌」の掲載数は二七二作品。

内訳は、第一四半期が七五作品。

第二四半期が九六作品。

第三四半期が七三作品。

第四四半期が二八作品。

昭和十七年に掲載された「短歌」二七二作品のうち、作品内容に「戦時下」色に見えるのは一一九作品(約四三・八%)。

内訳は、第一四半期では七五作品中三六(四八・〇%)。

第二四半期では九六作品中四三(約四四・八%)。

第三四半期では七三作品中二二(約三〇・一%)。

第四四半期では二八作品中一八(約六四・三%)。

第四四半期の掲載数が少ないのは、十月が二日間の四作品のみ、十

一月が五日間の一三作品、十二月が四日間の一一作品であったことによる。

因みに、「東日小学生新聞」の発行された昭和十二年から十七年における「短歌」作品の内容に「戦時下」色を内容とする作品は、次のようになる。

昭和十二年は、七七作品中 一五(約一九・五%)。

昭和十三年は、一九四作品中 五一(約二六・三%)。

昭和十四年は、一二七作品中 三七(約二九・一%)。

昭和十五年は、三三三作品中 八二(約二五・四%)。

昭和十六年は、一六六作品中 三八(約二二・九%)。

昭和十七年は、二七二作品中一一九(約四三・八%)。

十七年の「短歌」は、掲載数が最も多かった十五年より五一作品少ないが、「戦時下」を内容とする作品の掲載率は一八・四%増加し、掲載率が高かった十四年と比較しても一四・七%の増加となった。

なお、十七年一年間に、複数の「短歌」作品が掲載された児童は、最多の八首が一名(秋田県七日市校五年女子)。

七首が二名(秋田県七日市校五年女子と神奈川県藤沢市藤高校高二男子)。

六首が二名(北海道月寒校高二男子と山形県米沢市松岬校高二女子。松岬校の女子は、「しげ子」が五首で、「しげる」が一首であったが、後者は「子」の誤植と判断した)。

以下、五首が三名、四首が三名、三首が六名、二首が一七名であった。

また、同じ在籍校で、一年間に最多の一八首が掲載されたのは、埼玉県栗橋校(高二男子五名。五首三名、二首一名、一首一名)。

一六首掲載されたのが一校。秋田県七日市校(五年女子三名。八首一名、七首一名、一首一名)。

九首が北海道月寒校の一校。高二男子二名で、六首と三首が掲載された。

八首が神奈川県藤沢市藤高校の二校。高二男子二名で、七首と一首が掲載された。

七首が山梨県穂積校の二校。五年生三人で三首と高二四人で四首。

六首が二校。神奈川県海老名校（六年男子五名で一名が二首、四名が一首ずつ）と山形県米沢市松岬校（高二女子一名で六首）。

五首が二校。栃木県熱田中央校（高二女子一名）と福島県浪江校（五年男子一名で二首と高二男子一名で四首）。

その他、四首が四校、三首が二校。

以下、四半期毎に検討するが、都合上、内容に「戦時下」色の見える作品に第一四半期から第四四半期まで整理番号を付す。

## 二 昭和十七年第一四半期における「短歌」

第一四半期（一月～三月）に掲載された「短歌」は七五首。

この内、作品内容に「戦時下」色の見えるのは、次の三三六首であり、掲載率は四八%となる。

- 1 暮れて行く空にかゝれる月淡く征きにし父の姿浮かぶも  
（千葉県東大戸校六年男子、一月七日・水、第一六四七号）
- 2 日の本に生まれて来たる喜びを胸に抱きて初詣でする  
（福島県新鶴第二校高一男子、一月八日・木、第一六四八号）
- 3 たゞ一人社の前にぬかづきぬ拍手響く朝の静けさ  
（新潟県相川校高一女子、一月十四日・水、第一六五三号）
- 4 召され征く兵のあるらし朝霜の白き軒端に国旗はためく  
（埼玉県新会校高二男子、同前）
- 5 こんちはと郵便屋さんの声きけば便り待つ身の心とゞろく  
（千葉県鶴枝校高一女子、一月二十四日・土、第一六六二号）
- 6 この命あらむ限りは大君の御楯とならむと兄は征きけり  
（戦時下における児童文化）について（その二五）
- 7 白衣着た兵隊さんの枕へに慰問の金魚がやさしく泳ぐ  
（山梨県船津校高一男子、一月二十八日・水、第一六六五号）
- 8 心よりシンガポール陥落祈りつゝ兵隊さんの御苦労に泣く  
（埼玉県大森生校六年男子、同前）
- 9 勇ましく香港島を占領せし御旗の下に我が父もあり  
（東京市板橋区開進第三校五年男子、二月十一日・水、第一六七七号）
- 10 寒い朝神社の森にこだまする戦勝祈願の拍手の音  
（山形県西郷校三年女子、二月十三日・金、第一六七九号）
- 11 昔から家に伝はる鉄瓶もお国のために戦車になりぬ  
（神奈川県小田原市新玉校五年男子、同前）
- 12 あれも書けこれも書けと母のたまへば慰問の文はなかく出来ず  
（新潟県市振校六年男子、同前）
- 13 幾度か兵の征きけむこの道に今蕭条と英霊迎ふる  
（宮城県広瀬校高一男子、二月十五日・日、第一六八一号）
- 14 君が代を歌へばこゝろ静もりて尊き君のお姿思ふ  
（山梨県高田校六年女子、二月十八日・水、第一六八三号）
- 15 夜業にも皇軍の苦勞偲びつゝ父といそむ藁細工かな  
（福島県石田校高二男子、同前）
- 16 大空に銀翼のばし翔りゆく我が空軍のたのもしきかな  
（東京市渋谷区大和田校六年男子、同前）
- 17 ひだまりの縁で足袋つぐ祖母の顔召されし孫を思ひて微笑む  
（東京市向島区中川校六年女子、二月二十七日・土、第一六九一号）
- 18 朝刊に目覚むるばかりの大活字顔も洗はず旗出しにけり  
（神奈川県海老名校六年男子、三月四日・水、第一六九五号）
- 19 竹鉄砲かついだ子らの戦闘部隊にぎりこぶしのラッパで行くよ  
（神奈川県藤沢市第二校六年男子、三月六日・金、第一六九七号）
- 20 皇軍の労苦をわれらうけつぎて末は伸びよう南へ北へ  
（東京市渋谷区大和田校六年男子、三月七日・土、第一六九八号）



- 21 出征の兵士を送る停車場に軍歌うたひて汽車をまつかな  
(神奈川県海老名高校六年男子、同前)
- 22 沿道につゝしみ迎ふ英霊は父に抱かれ歩み来ませり  
(宮城県広瀬高校一男子、同前)
- 23 ひらくと昭南島にひるがへるすめらみくにの日の御旗かな  
(東京市渋谷区大和田校六年男子、三月十日・火、第一七〇〇号)
- 24 連戦連勝にゆるぎなき我が日の本に美しき春は来にけり  
(群馬県桐生市第一校高一男子、三月十二日・木、第一七〇二号)
- 25 日曜日神まゐりして満洲の兄の御無事を祈りけるかな  
(福島県月輪校高一女子、三月十三日・金、第一七〇三号)
- 26 陥落とラジオで聞きしその一瞬からだふるへて涙こぼれぬ  
(東京市渋谷区渋谷校高一男子、同前)
- 27 村人の迎ふる中を歩み来し英霊の父よ面はふせつゝ  
(宮城県広瀬校高一男子、同前)
- 28 叔母の住むパラオの安否気づかひてラジオニュースに汗にぎるなり  
(福島県伊北校高一女子、三月十五日・日、第一七〇五号)
- 29 雪晴れてしづかなる今日満蒙の曠野めざして我が友はゆく  
(福島県石田校高一男子、三月十八日・水、第一七〇七号)
- 30 落下傘で幾百の兵敵陣に突入せりと聞くもたつとし  
(東京市渋谷区渋谷校高一男子、三月二十二日・日、第一七一一号)
- 31 母上に父はえらしとはげまされえらくなるぞとちかふ仏前  
(神奈川県海老名校六年男子、同前)
- 32 春雨に行在所と奉安庫のあひの桜も色づきにけり  
(山形県清川校五年男子、三月二十五日・水、第一七二三号)
- 33 君が代のみ歌うたへば何故か熱き涙の溢れいづるも  
(東京市滝野川区谷端校六年男子、同前)
- 34 防空訓練の終れる夜の灯火にひとり読みあはるる広東進軍抄  
(北海道月寒校高一男子、同前)
- 35 我が家に兵の誇はあらねども銃後のまもりおろそかにせず
- 36 雪晴れて朝日がやく武蔵野に風にはためき日の御旗立つ  
(東京市目黒区目黒校六年女子、三月二十九日・日、第一七一七号)
- 1 暮れて行く空にかゝれる月淡く征きにし父の姿浮かぶも  
 5 こんちはと郵便屋さんの声きけば便り待つ身の心とゞろく  
 6 この命あらむ限りは大君の御楯とならむと兄は征きけり  
 9 勇ましく香港島を占領せし御旗の下に我が父もあり  
 17 ひだまりの縁で足袋つく祖母の顔召されし孫を思ひて微笑む  
 25 日曜日神まゐりして満洲の兄の御無事を祈りけるかな
- これら六作品は、何れも父や兄、孫の、家族が出征中ということ。  
 第一首「暮れて行く」は、作者が見ている月の姿を、出征中の父も  
 見ていることだろうと期待しているもの。出征するとき、どこにいて  
 も月を見ているとでも、父が言い残したか。児童にとって「月」は、  
 父と結ぶ縁だ。
- 第五首「こんちはと」も出征中の家族からの軍事便を待っている  
 ということであろう。「郵便屋さん」が運んでくれる「便り」だけが、  
 出征中の家族との「頼り」ということ。
- 第六首「この命」は、出征が「大君の御楯」になることだと、兄が  
 口にしたということ。壮行会での挨拶でも述べたか。
- 第九首「勇ましく」は、香港を占領（昭和十六年十二月二十五日）  
 した軍隊に父が所属していたということ。
- 第一七首は、ひだまりで足袋を繕っている祖母の顔に微笑みが浮か  
 ぶのを見ると、一見、穏やかな光景である。しかし、その微笑み  
 は、「召されし孫を思ひて」であることを作者は知っているといふこ  
 と。
- 祖母は、孫の何を「思ひて」微笑んでいるのであろうか。  
 第二五首「日曜日神まゐり」は、日曜日毎、神社に兄の無事を祈り  
 に行くというもの。「満洲の兄」は、満蒙開拓団とも兵士ともとれる

が、その無事を神に願う家族がいるということ。

- 2 日の本に生まれて来た喜びを胸に抱きて初詣でする
  - 3 たゞ一人社の前にぬかづきぬ拍手響く朝の静けさ
  - 10 寒い朝神社の森にこだまする戦勝祈願の拍手の音
  - 31 母上に父はえらしとはげまされえらくなるぞちかふ仏前
- 以上の四作品は、何れも神仏に纏わるもの。

第二首の「初詣」は、年の初めの風習であろうが、「日の本に生まれて来た喜び」の意味するものが、連戦連勝という戦況にあると推測され、「戦時下」色の現れた作品とした。

第三首と第一〇首は、「戦勝祈願」。児童は、「戦勝祈願」を日常とし、「寒い朝」でも「拍手の音」を響かせていたということ。

第三十一首は、亡くなった「父」のようになれとの母の励ましに、「えらくなる」ことを父に誓った児童のこと。「父はえらし」は、不詳であるが、母と児童には分かっているということであり、時局柄から、亡くなった父を軍人と推測した。

- 4 召され征く兵のあるらし朝霜の白き軒端に国旗はためく
  - 11 昔から家に伝はる鉄瓶もお国のために戦車になりぬ
  - 13 幾度か兵の征きけむこの道に今蕭条と英霊迎ふる
  - 21 出征の兵士を送る停車場に軍歌うたひて汽車をまつかな
  - 22 沿道につゝしみ迎ふ英霊は父に抱かれ歩み来ませり
  - 27 村人の迎ふる中を歩み来し英霊の父よ面はふせつゝ
  - 29 雪晴れてしづかなる今日満蒙の曠野めざして我が友はゆく
  - 35 我が家に兵の誇はあらねども銃後のまもりおろそかにせず
- 以上の八作品は、出征に纏わる作品。
- 第四首、第二十一首は、出征兵士に係わるもの。出征兵士の見送りは家の軒端に国旗を飾り、停車場では軍歌を歌って出発を待った。第一一首は、鉄瓶の、いわば出征。昭和十六年八月三十日に「金属

「戦時下における児童文化」について（その二五）

類回収令」が公布され、九月一日施行されていたが、十二月八日の「大東亜戦争」開始により、鉄と銅の回収が強化された。「家に伝はる」大切な鉄瓶も回収されたということ。

第一三首、第二二首、第二七首の三作品は、一人の児童による英霊迎への作品。三作品の投稿事情は不明であるが、内容からは同じ日の英霊迎へと推測される。児童は、出征してゆく兵士の見送りに並び、戦死した兵士の英霊迎への列に並んだ。

第二九首は、満蒙開拓青少年義勇軍に加わり、満洲へ旅立つ「我が友」を見送るもの。この青少年義勇軍は、満蒙の開拓という旗印の下、ソ満国境の備えが想定され、義勇兵としての役割を持った少年達であり、この出発は満洲への「出征」であった。

第三五首は、我が家には出征することのできる父や兄がいないということ。その代わりに「銃後のまもり」をしっかりとすると決意があったか。

- 7 白衣着た兵隊さんの枕へに慰問の金魚がやさしく泳ぐ
  - 12 あれも書けこれも書けと母のたまへば慰問の文はなか／＼出来ず
- 第七首は、病院に傷病兵を見舞ってみると、慰問の金魚が枕元で泳いでいたということ。金魚鉢で泳ぐ金魚が「白衣を着た兵隊さん」の慰みになるということであり、病院への慰問も児童の役割であった。
- 第一二首は、兵士への慰問文を書いている児童に、母が傍から口を挟んで、作文が中々進まないという光景。慰問文を作って送るのも児童の役割であった。
- 8 心よりシンガポール陥落祈りつゝ兵隊さんの御苦勞に泣く
  - 18 朝刊に目覚むるばかりの大活字顔も洗はず旗出しにけり
  - 23 ひら／＼と昭南島にひるがへるすめらみくにの日の御旗かな
  - 26 陥落とラジオで聞きしその一瞬からだふるへて涙こぼれぬ

28 叔母の住むパラオの安否気づかひてラジオニュースに汗にぎるなり

30 落下傘で幾百の兵敵陣に突入せりと聞くもたつとし

第八首の掲載は、二月四日。シンガポール陥落は二月十五日。

「少國民新聞」は、一月十三日（火・第一六五号）第二面中央に、「クアラ・ルンプール 皇軍主力入城 新嘉坡へ百六十軒」の記事を掲載した。

マレー西岸を猛進撃のわが先鋒部隊は十一日午前十一時三十分クアラ・ルンプールに突入したと、十二日午後一時十五分大本営から発表されました。引続き主力部隊も午後六時半堂々入城、完全に占領して政庁に大日章旗を翻しました。これで皇軍は、シンガポールまで百六十キロに迫りました。わが精銳は逃げる敵を追つて、続々南へ南へと猛進を続けてゐます。

ここからは、「兵隊さんの御苦労に泣く」は読み取れないが、作品の掲載日を考慮すると、この記事の掲載前後に詠まれたと推測される。

第一八首の掲載は三月四日。シンガポールの陥落が二月十五日であったから、「朝刊に」大活字が躍ったのは、この戦勝記事であつたか。

ゆうべ二月の十五日

英国が牙城とたのむ

シンガポールは、

つひに落ちたのだ。

雪どけの家々の

屋根の上に、

日の丸の旗が、

ひらめく。

二月十八日（水・第一六八三号）に掲載された詩作品「凄いな、強いな」（東京市下谷区黒門校五年女子）の一節であるが、シンガポールの陥落を祝って、家々では日の丸の「旗出しにけり」ということ。

第二三首は、三月十日の掲載。二月十八日の「少國民新聞」（水・

第一六八三号）は、第一面に「昭南島」と改名 生れ変つた新嘉坡の見出しで、大本営が、十七日正午に、シンガポール島は「昭南島」と呼び、港は「昭南港」と呼ぶことに決めた記事を掲載した。「昭南島にひるがへるすめらみくにの日の御旗」の一節は、同じ紙面に掲載された「全市に日章旗」の記事にある「シンガポールの青空には、くつきりと赤と白の日章旗が全市街に翻つてゐます」を指すか。

第二六首「陥落とラジオで聞きしその一瞬」は、シンガポールの陥落が、二月十五日午後十時十分から臨時ニュースで流されたこと。これを聞いて「からだふるへて涙こぼれぬ」と詠んだが、同様に、臨時ニュースを聞いて「お父さんは泣いてゐる。僕もこみあげて来た」と詩作品（二月二十二日・日、第一六八七号「みんな涙だ」東京市中野区神明校五年男子）に描いた児童もいた。

第二八首「叔母の住むパラオ」は、第一次世界大戦の結果、パリ講和会議によって日本の委任統治領となり、南洋庁が置かれていた。

「大東亜戦争」が始まると、海軍の北西太平洋方面の作戦拠点であつたことから連合軍からの攻撃対象となり、「叔母」の安否が児童には気がかりでならなかつた。

第三〇首「落下傘で幾百の兵敵陣に突入せり」は、落下傘部隊のこと。これまで落下傘部隊の存在は国民には知られていなかった。

決死訓練で産れ出た

わが落下傘部隊

見よ初陣の輝く大武勲

昨日お知らせしたやうに、わが陸軍落下傘部隊は、十四日スマトラ島のバレンバンに、また、海軍落下傘部隊は、十一日セレベス島メナドに降下して、輝く武勲をたてました。日本に落下傘部隊があつたのか。このことは、無敵皇軍の威力に、更に世界の驚異と、銃後国民の讃嘆を加へました。

「少國民新聞」が、昭和十七年二月十八日（水・第一六八三号）第二面に、写真「陸軍落下傘部隊の服装」（陸軍省貸下げ）を添えて掲

載した記事である。

「私たちの知らないうちに組織され、南海に堂々と初陣の功をたてたのであります」と記されたように、十一日の海軍落下傘部隊の攻撃は十四日の陸軍落下傘部隊の攻撃まで発表されず、「銃後」にも秘匿された奇襲攻撃だった。

14 君が代を歌へばこゝろ静もりて尊き君のお姿思ふ

33 君が代のみ歌うたへば何故か熱き涙の溢れいづるも

二首とも「君が代」を歌う時の感懐が内容。

第一四首の「尊き君」は天皇であり、「君が代」と天皇が表裏一体であるということ。

第三三首は、「君が代」と「熱き涙」が一体化しているとするが、その理由は「何故か」であり、理由ははっきりとしない。

15 夜業にも皇軍の苦勞偲びつゝ父といそしむ藁細工かな

20 皇軍の勞苦をわれらうけつぎて末は伸びよう南へ北へ

共に、「皇軍の苦勞」が意図された作品。

第一五首は、「皇軍の苦勞」を思いやりながら、父と「夜業」に励む児童のこと。高等科二年生は立派な働き手ということだ。

第二〇首は、「少国民」として、やがては「皇軍の苦勞」を受け継いで「南へ北へ」と戦闘に活躍するとの決意であろうが、その決意が大人からの要請であり、児童の決意となっていたということ。

16 大空に銀翼のぼし翔りゆく我が空軍のたのもしきかな

19 竹鉄砲かついだ子らの戦闘部隊にぎりこぶしのラッパで行くよ

24 連戦連勝にゆるぎなき我が日の本に美しき春は来にけり

32 春雨に行在所と奉安庫のあひの桜も色づきにけり

34 防空訓練の終れる夜の灯火にひとり読みるる広東進軍抄

36 雪晴れて朝日かがやく武蔵野に風にはためき日の御旗立つ

「戦時下における児童文化」について（その二五）

何れも、「銃後」の児童が目にしたもの。

第一六首は、大空を飛んで行く「空軍」を見送った時の感動。

第一九首は、年下の子供たちの兵隊さんごっこを見ている児童の作品。「にぎりこぶしのラッパ」は、「戦闘部隊」の先頭をいく子供がラッパ手に成りきっている様子を詠んだ。

第二四首は、戦地での「連戦連勝」をよろこぶ「銃後」に「美しき春」がきたというもの。

第三二首の行在所は、明治天皇が明治十四年九月に東北・北海道を巡行したときに山形県清川村（現・庄内町清川）に作られたもの。その傍らの「桜も色づき」始めたというもので、これだけでは山形にも春が来つつあるという季節の作品であるが、その桜は「奉安庫」との間であり、その「奉安庫」故に「戦時下」色のある作品とした。

第三四首の「広東進軍抄」は、日野葦平の作品で、広東上陸作戦を描いたもの。「防空訓練」が行われた夜の読書であるが、「少国民新聞」は、二月一日（日・第一六六九号）第二面に「全国で「防空の常会」を掲載し、「防空は実戦だ」と、二月八日の大詔奉戴日を中心に、全国の隣組で常会を開き、「完全な防空の研究」について「防空常会で注意をし合ふ」項目を示した。作品の「防空訓練」もその一環であったか。

第三六首の掲載は三月二十九日であるが、東京に降った雪に朝日が輝いている風景である。春の雪に日の丸がはためいているといった、一見、季節の作品であるが、「日の御旗立つ」の表現にこの時代の「風」があるということ。

第一四半期における「短歌」の戦時下は、家族が出征中という、当事者であり、出征の見送りに、戦死した英霊を迎える列に整列し、満洲へ旅立つ「我が友」を見送った。戦勝祈願の神社参拝も、傷病兵への慰問、慰問文作成も児童の役割であった。

第一四半期における最大の戦果はシンガポールの陥落であり、多く

の作品に読み込まれた。「銃後」の児童は、「皇軍の苦勞」を思いやり、大空の銀翼を頼もしく思い、子供たちは兵隊さんごっこに興じていた。連戦連勝を喜ぶ一方、「銃後」では防空訓練も「実戦」と見たてられた。

これらを内容とする「短歌」作品は、児童が置かれていた「戦時下」であったということだ。

一方、第一四半期の「短歌」は、七五首であり、戦時下色を内容とする作品が三六首あるものの、残りの三九首は、児童の身の回りの日常を内容とする作品であった。

漸くに吹雪の一夜明けにけり陽の照り渡る街のまぶしさ

(北海道月寒校高二男子、一月七日・水、第一六四七号)  
わらぶきの陽がよく当る屋根上で猫が一匹昼寝してゐる

(東京市板橋区開進第三校五年男子、一月八日・木、第一六四八号)

作品を詠んだ時期は不明であるが、一日違いの掲載である。北海道と東京に住む児童が目にした冬の「陽」ということ。吹雪明けの街に照り渡る陽ざしと猫の昼寝を誘う陽ざしの違いが、この時期の季節だ。新しい筆入れ買つてその中にペンとナイフを入れた嬉しさ

(福島県川部校六年女子、一月十一日・日、第一六五三号)  
いらだたしき夕なるかも鉛筆のしんを鋭く削りて見たり

(秋田県響第一校六年男子、一月十四日・水、第一六五三号)  
「新しい筆入れ買つて」は、その「嬉しさ」が伝わってくる。微笑んでいる女子児童が見える。

「いらだたしき」には、叱られてもしたか、鉛筆を鋭く削っている男子児童のナイフが見える。同級生児童の明と暗の心の風景だ。

小雀の鳴きゆく声に気をとめてふりむき見れば枝の雪落つ  
(岩手県宮古市千徳校六年男子、三月六日・金、第一六九七号)

鬼怒川の流れに我も入りて見む水あたゝかき春は来にけり

(栃木県絹校高二女子、同前)  
同日の掲載であるが、岩手県宮古では枝に雪があり、栃木県鬼怒川では水が温んで春が来た。

山小屋の炭焼く煙ゆら／＼と青空にのぼる春は来ませり

(千葉県松丘校六年男子、三月二十九日・日、第一七一七号)  
掲載日からしても、「春は来ませり」ということ。児童は、ゆらゆら立ち上る炭焼きの煙に春の到来を見ているということ。

戦時下にあっても、児童は、冬の陽を、春の到来を詠い、心のふるえを描いてみせた。

以上、昭和十七年第一四半期の「短歌」を検討してきた。

掲載された七五首のうち三六首が戦時下色を内容とするものであり、掲載率からは四八％となり、ほぼ五割にのぼっている。児童が置かれた戦時下がいよいよ色濃くなってきたことの現われといえる。

### 三 昭和十七年第二四半期における「短歌」

第二四半期(四月～六月)に掲載された「短歌」は九六首。その内、作品内容に「戦時下」色が見えるのは、四三首であり、掲載作品に占める掲載率は約四四・八％となる。

37 日の御旗昭南島にひるがへる日出づる国のめぐみあふれて

(神奈川県高部屋校五年男子、四月一日・水、第一七一九号)

38 日の本に生まれし勇士は神技をもちて破りぬ真珠湾を

(秋田県湯沢校高一男子、同前)

39 北支那の兄の便りをわれ読めば縫ふ手やすめて母きき給ふ

(茨城県県湊第一校高二女子、四月五日・日、第一七二二号)

40 悪水になやむ戦地を思ひやり我が家の水のありがたく使ふ

(新潟県新飯田校高二女子、四月十五日・水、第一七三〇号)

41 咲きにほふ桜の如き日本は今南方に進み行くかな



- 42 この年は意義ある年ぞことほぎて日出づる国の栄えいのらむ  
(山梨県石和校六年男子、四月十七日・金、第一七三二号)  
(新潟県新津校高二男子、四月十九日・日、第一七三四号)
- 43 今日もまた我が日の本のいくさ船は南の海に敵を破りぬ  
(栃木県宇都宮市西校六年女子、四月二十四日・金、第一七三八号)
- 44 幾年も待ちしかひあり海鷲の御稜威の光世にかがやけり  
(福島県伊北校高一女子、同前)
- 45 うみわしのたてし功をラジオにて聞くたびごとに涙せりけり  
(福島県伊北校高一女子、四月二十八日・火、第一七四一号)
- 46 いまさらに地図を開きて大君の御稜威の光ひるがへるをしる  
(北海道銭函校高\*男子、五月一日・金、第一七四四号)
- 47 戦勝を告ぐるラジオの声高くけふのよき日の空をわたりぬ  
(新潟県新飯田校高二男子、五月二日・土、第一七四五号)
- 48 みいくさは日の本の国であればこそ西に南に勝ちすすむなり  
(東京市葛飾区中井堀校高二女子、五月三日・日、第一七四六号)
- 49 日の本の幸ある国に生まれあひし我等御民も祝ふよき日を  
(埼玉県栗橋校高二男子、五月五日・火、第一七四七号)
- 50 国思ふ火玉となりて我もまた仇なす敵を撃ちに撃たなん  
(北海道月寒校高二男子、同前)
- 51 朝早く氏神様の庭をはき心を清め必勝祈る  
(北海道月寒校高二男子、五月六日・水、第一七四八号)
- 52 夕やけの雲ながれ行く大空にそびえ立ちたり忠霊塔は  
(北海道千代ヶ岱校六年男子、五月十日・日、第一七五二号)
- 53 ささやかな御奉公と思ひ朝夕に軍馬飼料の茶がらすすなり  
(埼玉県栗橋校高二男子、五月十二日・火、第一七五三号)
- 54 おなじこの青空のもとに戦のまだすまぬ土地あり春深みゆく  
(埼玉県栗橋校高二男子、五月十四日・木、第一七五五号)
- 55 夢にだに見ざりし国の鳥々にみことのままに日の丸ぞ立つ  
(北海道徳星校高一男子、同前)
- 56 荒鷲の爆音きこゆをの子われ旗をふりつつ万歳叫びぬ  
(福島県神谷校五年男子、五月十五日・金、第一七五六号)
- 57 神国に生まれし今日の喜びを父に告げなむ靖国の宮  
(埼玉県栗橋校高二男子、同前)
- 58 その命ひかりと燃えて敵艦を貫きとほすたま放ちけり  
(北海道徳星校高一男子、五月十六日・土、第一七五七号)
- 59 ほの暗くまだ起きやらぬ家々の空をまもりて荒鷲は飛ぶ  
(埼玉県栗橋校高二男子、五月二十一日・木、第一七六一号)
- 60 戦況のニュース報ずるその人の感激深く声ふるへたり  
(埼玉県栗橋校高二男子、五月二十四日・日、第一七六四号)
- 61 赤々と電灯のついた午後の五時輝くニュースに父は喜ぶ  
(秋田県七日市校五年女子、同前)
- 62 出征旗はためく朝を鯉職吹き流れたり青葉の上を  
(埼玉県栗橋校高二男子、五月二十八日・木、第一七六七号)
- 63 青き草生ひし山路歩きつつ荒鷲の歌思はず歌ふ  
(福島県浪江校高二男子、五月二十九日・金、第一七六八号)
- 64 戦勝をきく度ひとり胸躍り神の御国の有難さ知る  
(北海道糸魚校高二女子、同前)
- 65 校庭に並ぶ生徒の顔色も今日は輝く奉戴日かな  
(宮城県白石校高二男子、同前)
- 66 あかあかとあまねく照らす太陽に勝り輝く皇軍の勲  
(青森県野辺地校高二男子、同前)
- 67 戦地より届く返事のゆかしさに慰問の筆をまたもとるかな  
(福島県下関校六年男子、同前)
- 68 れんげ草咲いた野原にねころびて大空翔ける飛行機を見る  
(福島県浪江校高二男子、五月三十日・土、第一七六九号)
- 69 日の本の空の護りのかたければ敵機は見えずたのもしきかな  
(山形県豊川校高一男子、六月三日・水、第一七七二号)
- 70 炎熱の下に戦ふ将士らの辛苦しのびて我ら勇みぬ

- 71 戦へる国を思へば一粒の米といへども尊かりける  
(青森県野辺地校高二男子、同前)
- 72 れんげ草咲いた野原にねころびて大空翔ける飛行機を見る  
(埼玉県栗橋校高二男子、六月四日・木、第一七七三号)
- 73 兄征きて誉れの家の数に入るわが家に高き旗立てにけり  
(福島県浪江校高二男子、同前)
- 74 青空を飛行機飛ぶよ勇ましく三機編隊銃後の空を  
(岩手県北方校四年女子、六月五日・金、第一七七四号)
- 75 青空に日の丸の旗が上つて行くほんとに気持がよい朝だ  
(埼玉県栗橋校高二男子、六月十七日・水、第一七八四号)
- 76 太平洋丘の上から見渡して燃える心をじつと押さへぬ  
(山梨県穂積校五年女子、六月十八日・木、第一七八五号)
- 77 われ一人宮に額つき皇軍の武運祈りし今朝の静けさ  
(岩手県平山校六年男子、同前)
- 78 日参の人繁きらし鈴の音かすかに響く朝の教室  
(青森県野辺地校高二男子、六月十九日・金、第一七八六号)
- 79 凱旋の兄に抱かれて弟は小旗ふりつつ万歳といふ  
(福島県掛田校高二男子、六月二十一日・日、第一七八八号)  
(千葉県飯野校高一男子、六月二十六日・金、第一七九二号)
- 37 日の御旗昭南島にひるがへる日出づる国のめぐみあふれて
- 38 日の本に生まれし勇士は神技をもちて破りぬ真珠湾を
- 41 咲きにほふ桜の如き日本は今南方に進み行くかな
- 43 今日もまた我が日の本のいくさ船は南の海に敵を破りぬ
- 48 みいくさは日の本の国であればこそ西に南に勝ちすすむなり
- 55 夢にだに見ざりし国の島々にみことのまに日の丸ぞ立つ
- 66 あかあかとあまねく照らす太陽に勝り輝く皇軍の勲
- 以上の七作品は、戦果や戦闘を内容とするもの。
- 第三七首は、第一四半期の作品、第二三首「昭南島にひるがへるす

- めらみくにの日の御旗」のこと。シンガポール島は「昭南島」と呼ぶことになり、「全市街に翻つてゐます」と二月十八日の「少国民新聞」(前出)は報じていた。
- 第三八首、真珠湾を神技で破った「勇士」は、九軍神のこと。「少国民新聞」は、三月七日(水・第一六九八号)第一面で「万世照らす海の軍神」の見出しに、「あゝ、真珠湾全滅戦、遂に帰らぬ九柱」の見出しを添えて、真珠湾を攻撃した特殊潜航艇の記事を掲載した。「大本営」は、三月六日、真珠湾攻撃から帰還しなかった特殊潜航艇の九人を二階級特進の「海の軍神」として発表した。第三八首は、この記事をみてのことであろう。
- 第四一、四三、四八、五五、六六首は、南方戦線での戦闘や戦果を報じた「少国民新聞」を児童が目にしての詠歌といえよう。
- 39 北支那の兄の便りをわれ読めば縫ふ手やすめて母きき給ふ
- 52 夕やけの雲ながれ行く大空にそびえ立ちたり忠霊塔は
- 57 神国に生まれし今日の喜びを父に告げなむ靖国の宮
- 62 出征旗はためく朝を鯉轆吹き流れたり青葉の上を
- 67 戦地より届く返事のゆかしさに慰問の筆をまたもとるかな
- 73 兄征きて誉れの家の数に入るわが家に高き旗立てにけり
- 79 凱旋の兄に抱かれて弟は小旗ふりつつ万歳といふ
- 以上、七作品は、出征に纏わる内容。
- 第三九首「北支那の兄」からの便りは、家族が待ち望んでいた無事の知らせか。兄は出征中ということ。
- 第五二首「忠霊塔」は、出征の結果の一つである地域出身の戦死者を祀るもの。作者である児童の生活圏にも「忠霊塔」が建てられているということ。
- 第五七首、出征した父は戦死。靖国神社に祀られている父に「神国に生まれし」喜びを告げるといふ内容であるが、三月二十八日と二十九日の二日間、全国の遺児五千五十九名が靖国神社を参拝し、「護国



の神となられたお父さんと、うれしい心の対面」をした。作者の埼玉県は、二十九日で、東京・千葉などの二千五百十余名が参拝した〔少国民新聞〕三月二十九日・日、第一七一七号。作者の児童もその一人であったか。

第六二首の「出征旗」、七三首の「高き旗」は、出征兵の家には日の丸の旗が立てられたということ。

七三首の「誉れの家」は、講談社『昭和5』（平成元・一一）によれば、戦没者の家の門柱や玄関に貼られた表札こと。市区町村が配布し、戦没者への哀悼と遺族への援護を求めたものであったが、出征者の帰還を望んでいた遺族にとっては、この表札は嘆きや恨みの対象となり、招集兵の家には「名誉の家」の札がはられたとある。とすれば、七三首「誉れの家」の出征した兄は戦死したということか。

第六七首は、児童が送った慰問の手紙に、戦地から返事が届き、それへの返信の慰問の手紙を「またもとる」ということ。不特定の兵士にあてた慰問文に戦地から返信があり、それに児童が返信の慰問文を送り、といったように、幾度かの往復便があったということか。

第七九首は、出征していた兄の「凱旋」の出会い風景。「兄」と「弟」が作者の家族かどうかは不明だが、知り合いの兄弟ではあるようだ。

- 40 悪水になやむ戦地を思ひやり我が家の水のありがたく使ふ  
42 この年は意義ある年ぞことほぎて日出づる国の栄えいのらむ  
50 国思ふ火玉となりて我もまた仇なす敵を撃ちに撃たなん  
70 炎熱の下に戦ふ将士の辛苦しのびて我ら勇みぬ  
71 戦へる国を思へば一粒の米といへども尊かりける  
76 太平洋丘の上から見渡して燃える心をじつと押さへぬ
- 以上、六作品は、「銃後」の覚悟が内容。
- 第四〇首の「悪水になやむ戦地」は、戦地からの便りに書いてあったか。戦地の苦勞を思つて、「銃後」の我が家の水を無駄にしないと

「戦時下における児童文化」について（その二五）

の思いか。

第四二首「この年は意義ある年ぞ」からは、年の初めの新春の祈りともとれるが、掲載日が四月十九日であり、詠歌の時期が不明でもあることから、「日出づる国の栄えいのらむ」とする「銃後」の祈りと考えておく。

第五〇首は「我もまた」という「銃後」の覚悟が内容。

第七〇首は、何に對しての「勇み」かは不明ながら、その何かに對する覚悟ということ。

第七一首は、節米が内容。「少国民新聞」は、三月十三日（金・第一七〇三号）第一面で「少国民献米稲作運動」の企画を広告し、五月八日（金・第一七五〇号）第二面でも、「少国民献米稲作運動」を報じたが、その目的は、「お米の有難さやお百姓さんの御苦勞、それ自身自身で知るため」。児童には、国が「戦へる」今、銃後にあって「一粒の米」の尊さの自覚ということ。

第七六首は、戦場となっている「太平洋」を見渡して、「燃える心」の覚悟を自覚しているもの。

- 46 いまさらに地図を開きて大君の御稜威の光ひるがへるをしる  
54 おなじこの青空のもとに戦のまだすまぬ土地あり春深みゆく  
66 あかあかとあまねく照らす太陽に勝り輝く皇軍の勲
- 以上、三作品は、御稜威に関するもの。
- 第四六首は、地図上に日本軍の占領地の広がりを見て、御稜威が広がっていくことを「しる」というもの。なお、「北海道銭函校高\*男子」の「\*」は学年表記が抜けているもの。
- 「少国民新聞」は、五月一日（金・第一七四四号）第二面で、「皇威南方にあまねし」の見出しで、「去る二十九日、大戦下に初の天長節」の記事を掲載し、「大御稜威は、われ等国民のみならず、遠く南方の諸民族」にも及んでいるとした。
- 第五四首は、「春深みゆく」頃、「戦のまだすまぬ土地あり」と、戦

闘が継続している地域があることを作者が知っているということ。御稜威がやがて及ぶ「土地」ということ。

第六六首、「皇軍の勲」が御稜威によるものであり、御稜威が「皇軍の勲」をもたらしたということだ。

49 日の本の幸ある国に生まれあひし我等御民も祝ふよき日を

65 校庭に並ぶ生徒の顔色も今日は輝く奉戴日かな

75 青空に日の丸の旗が上つて行くほんとに気持がよい朝だ

以上三作品は、大詔奉戴日のことが内容。

「大詔奉戴日」は、これまでの興亜奉公日に代えて十二月八日の対英米戦の「大詔」に因んで、毎月八日に「大詔奉戴日」が設けられ、役所・学校・会社・工場などで詔書奉読式が行われ、詔書奉読、必勝祈願、国旗掲揚、職域奉公など、国民運動が行われた。

51 朝早く氏神様の庭をはき心を清め必勝祈る

53 ささやかな御奉公と思ひ朝夕に軍馬飼料の茶がら干すなり

77 われ一人宮に額つき皇軍の武運祈りし今朝の静けさ

78 日参の人繁きらし鈴の音かすかに響く朝の教室

以上の四作品は、日々行われた児童と大人の「銃後奉公」。

第五一首、七七首は、児童自身が武運長久を祈る宮参り。

第七八首は、学校近くの神社に「日参」する人が響かす鈴の音によって参拝する「人繁き」を知るといふもの。児童の参拝は、「朝早く」であり「朝の静けさ」のなかであったが、大人の参拝は、児童が登校した後ということ。武運長久は、児童にも大人によっても祈られた日常の奉公。

第五三首は、軍馬の飼料として「茶がら」を干すというもの。家庭で出た「茶がら」は、干した後、地域で取りまとめ、軍馬の飼料とされた。その「茶がら」を干すのも児童の役割で、お国への「御奉公」ということ。

44 幾年も待ちしかひあり海鷲の御稜威の光世にかがやけり

56 荒鷲の爆音きこゆをの子われ旗をふりつつ万歳叫びぬ

58 その命ひかりと燃えて敵艦を貫きとほすたま放ちけり

59 ほの暗くまだ起きやらぬ家々の空をまもりて荒鷲は飛ぶ

63 青き草生ひし山路歩きつつ荒鷲の歌思はず歌ふ

68 れんげ草咲いた野原にねころびて大空翔ける飛行機を見る

69 日の本の空の護りのかたければ敵機は見えずたのもしきかな

72 れんげ草咲いた野原にねころびて大空翔ける飛行機を見る

74 青空を飛行機飛ぶよ勇ましく三機編隊銃後の空を

以上の九作品は、戦闘機が内容。

第四四首、五八首は、海軍の戦闘機「海鷲」のこと。「海鷲」の戦闘をニュース映画か新聞写真でも見たということか。

第五六首は、爆音で「荒鷲」の飛行に気付いた「われ」が「旗」を振って万歳をしたということ。「をの子」の「荒鷲」への憧れということ。

第五九首、六九、七四首は、戦闘機が「銃後の空」を護っていると「たのもしく」思っているということ。

第六三首は、軍歌「荒鷲の歌」が、山道を歩いていて口を突いて出てくるということ。この軍歌に慣れ親しんでいる結果だ。「荒鷲の歌」は、東辰三の作詞作曲、歌手・波岡惣一郎で昭和十五年十月に吹き込まれた。

第六八首と七二首は、同じ作品。六八首が五月三十日、七二首が六月四日に掲載された。再掲載された意図は不明。

45 うみわしのたてし功をラジオにて聞きたびごとに涙せりけり

47 戦勝を告ぐるラジオの声高くけふのよき日の空をわたりぬ

60 戦況のニュース報ずるその人の感激深く声ふるへたり

61 赤々と電灯のついた午後五時輝くニュースに父は喜ぶ

64 戦勝をきく度ひとり胸躍り神の御国の有難さ知る

以上の五作品は、作者の児童がラジオニュースを聞いている。

第四五、六一、六四首は、作者の児童であったり、父であったり、戦況に心躍らせているというもの。

第六〇首は、「ニュース報ずるその人」の声のふるえを感じているというもの。

第二四半期における「短歌」の戦時下は、新聞・ラジオニュース・ニュース映画などで見たのか海鷲・荒鷲の戦闘機や「皇軍」の戦いぶり内容とするもの。御稜威を、大詔奉戴日を詠み、出征に纏わる内容もあった。「銃後奉公」も児童の戦時下であったということ。

一方、第二四半期の「短歌」は、九六首であり、戦時下色を内容とする作品が四三首。残りの五三首は、児童の身の回りの日常を内容とする作品であった。

北国の山にも春の訪れてつぼみ色づく八重桜花

(北海道美唄校高一男子、四月十日・金、第一七二六号)

うらうらと日ざしなごめる沢の面に散りてこぼるる山桜あり

(宮城県広瀬校高二男子、四月二十六日・日、第一七四〇号)

「北国の」は、北海道にも桜前線が近づいて来たというもの。

「うらうらと」は、宮城県では桜前線が過ぎていくということ。

詠歌の時期は不明であるが、それぞれの住まいの季節の移りを視覚で捉えている。

ほかほかと陽のあたたかき青草にねころびて聞くひばりの声を

(長野県小布施校六年男子、五月十日・日、第一七五二号)

若草のかをり含みて吹く風に土手の昼げの心地よきかな

(栃木県熱田中央校高二女子、五月二十九日・金、第一七六八号)

「ほかほかと」は、いかにも温かそうである。「青草」の匂いにも包まれて「ひばりの声」を聞いている。

「戦時下における児童文化」について(その二五)

「若草の」は、吹く風に「かをり」を感じている。初夏の日差しに風に包まれ、児童は、季節の中に居る。

田を植えて人帰るたるひそけさや水田にうつる名月のかげ

(福島県小田倉校四年女子、六月十九日・金、第一七八六号)

庭先に棚かけやれば蔓のびて見よとばかりに朝顔の咲く

(山梨県大藤校六年男子、六月二十四日・水、第一七九〇号)

「田を植えて」は、昼間の人の有様から一転、静けさに包まれた水田に月が写っているという情景。作者は四年生。見事といわざるを得ない。

「庭先に」も見事。「見よとばかりに朝顔の咲く」との表現には、脱帽である。

何れにしても、両作品とも、季節がしっかりと取り込まれている。

青々と茂れる桑葉の間より桑つむ声の空にひろがる

(福島県深川校高二男子、六月九日・火、第一七七七号)

子兔に餌をくれればうまさうに頭揃へて食べて居るなり

(静岡県比木校六年男子、六月十八日・木、第一七八五号)

養蚕の桑摘みは、蚕があがるまでの力仕事。餌やりは毎日の担当ということか。児童は立派な働き手であった。

風邪心地かくせる母をいたはりて夕食の米われときにけり

(埼玉県栗橋校高二男子、五月二十六日・火、第一七六五号)

母上と散歩に行けばいつしかに遅れ給ふを立ちて待つなり

(山形県米沢市松岬校高二男子、六月二十一日・日、第一七八八号)

共に高等科二年生の男子児童。母親をいたわる年頃になったということであろうか。わが身に引き比べて、立派な成長ぶりだ。

以上、昭和十七年第二四半期の「短歌」を検討してきた。

掲載された九六首のうち四三首が戦時下色を内容とするものであり、掲載率からは約四四・八%となり、第一四半期の四八%には及ばないもの高い掲載率であり、第一四半期同様、児童が置かれた戦時下がいよいよ色濃いくことの現われといえる。

四 昭和十七年第三四半期における「短歌」

第三四半期（七月～九月）に掲載された「短歌」は七三首。

この内、作品内容に「戦時下」色の見えるのは、次の二三首であり、掲載作品に占める掲載率は約三〇・一％となる。

- 80 有難う兵隊さんと歌ひつつ配給のまりを妹はつく  
（東京市豊島区上高田校六年男子、七月一日・水、第一七九六号）
- 81 たたかへるみ国にありて生きてゆく人の命の尊さをしる  
（青森県田子校高二男子、七月三日・金、第一七九八号）
- 82 幸多き輝く御代に生まれ来て朝に筆を取るわれは  
（埼玉県栗橋校高二男子、同前）
- 83 青葉かげしばしたたずみききたりきまひるのそらに忠霊塔の歌  
（秋田県七日市校五年女子、七月五日・日、第一八〇〇号）
- 84 荒鷲のとどろくと見れば忽ちに翼きらめき雲に入りたり  
（千葉県菊間校高二男子、同前）
- 85 つつましく武運を祈り終へし時頭の上に小鳥鳴くなり  
（福島県牧野校六年男子、七月十日・金、第一八〇四号）
- 86 拍手の一つ一つにはもの御身安かれとただ祈るなり  
（埼玉県栗橋校高二男子、七月十二日・日、第一八〇六号）
- 87 いもほりを昨日しました大きいのが一分隊に出来てゐました  
（東京府大久野校四年男子、同前）
- 88 弁当のおかずをたべつつ思ふかな行列のなかの母の姿を  
（東京市中野区上高田校六年男子、七月二十六日・日、第一八一八号）
- 89 わが軍は今日も敵機をうち落しわが日の本の名をとどろかす  
（東京市荏原区戸越校五年女子、八月一日・土、第一八二三号）
- 90 全校生の七百人のかしは手は鎮守の森に響き渡れり  
（神奈川県藤沢市藤高校高二男子、八月五日・水、第一八二六号）
- 91 回覧板持ち来たる子のおかつばに湯あみの匂ひ残りゐるかも  
（新潟県新潟市二葉校高二男子、八月九日・日、第一八三〇号）
- 92 大いなる朝日を拝し皇軍の武運を祈る青空の下  
（茨城県軽野校高二男子、八月十六日・日、第一八三六号）
- 93 戦勝に輝く朝はおのづから鈍ふる腕に力湧きくる  
（北海道月寒校高二男子、八月二十八日・金、第一八四六号）
- 94 子供らの戦争ごっこを見てをれば溝のクリーク樽のトーチカ  
（神奈川県藤沢市藤高校高二男子、同前）
- 95 君が代と一しよに昇る日の御旗朝日をあびてはたはたと鳴る  
（北海道定山溪校六年女子、八月三十日・日、第一八四八号）
- 96 仮名まじり読みにくけれど尊きは老いたる母の慰問文なり  
（山梨県葛野校高二女子、九月二日・水、第一八五〇号）
- 97 ななたびも感状うけし神鷲の御霊よ護れ南方の空  
（東京市杉並区杉並第一校六年女子、同前）
- 98 わが心わが力をばうち込んで勤勞奉仕けふも終へたり  
（秋田県七日市校五年女子、同前）
- 99 ふみの業いよよはげまいたましき教への庭のたよりきくにも  
（山梨県大藤校六年男子、九月四日・金、第一八五二号）
- 100 けふもまた水に鍛へる子供らは海の勇士を語り合ふなり  
（千葉県梅郷校高二男子、同前）
- 101 秋風の吹き来る社の内庭で戦地思ひつ我は歌書く  
（岩手県大槌校高二男子、九月二十七日・日、第一八七二号）
- 80 有難う兵隊さんと歌ひつつ配給のまりを妹はつく
- 91 回覧板持ち来たる子のおかつばに湯あみの匂ひ残りゐるかも
- 94 子供らの戦争ごっこを見てをれば溝のクリーク樽のトーチカ
- 100 けふもまた水に鍛へる子供らは海の勇士を語り合ふなり
- 以上、四作品は、子供のことが内容。
- 第八〇首で「まり」をつく妹が、「有難う兵隊さん」と歌っている

のは、「兵隊さん」から送られたゴムで作った「まり」だからだ。「少国民新聞」は、昭和十六年九月二十七日（土・第一五六一号）第一面に「仏印の兵隊さんから嬉しいゴム製品」の見出しで、「仏印に進駐してゐる兵隊さんから、全国国民学校のヨイコドモのみなさん方へ、うれしいお土産を下さることにしました」との記事を掲載した。南方の占領地から送られてきたゴムで「男子学童には野球用スポンジボールが一人に一個づつの割で贈られ、女子にはたのしいお手マリが、四、五人に一個の割で」贈られることになり、「来年のお正月には、みなさんはこの仏印の兵隊さんのお年玉で元氣一ぱいにはね回ることです。兵隊さんありがとう」と記された。

第九一首は、風呂上りに「回覧板」を届けに来た女子児童のこと。「回覧板」回しは児童の役目だったということか。

第九四首は、「溝のクリーク樽のトーチカ」と工夫した「子供らの戦争ごっこ」を見ている。第一四半期第一九首の戦争ごっこでは、「にぎりこぶしのラッパ」だった。

第一〇〇首「水に鍛へる」とは、水泳で体力増進をはかるもの。夏休みは、休みではなく「鍛錬期間」であり、「大東亜戦争下、海へ海へのびて行く、第二の国民である皆さんは、今年こそ特に水の訓練を重ねておかなければなりません」（「少国民新聞」七月二十二日・水・第一八一四号、「皆で泳ぎませう」とされた）。

81 たたかへるみ国にありて生きてゆく人の命の尊さをしる

82 幸多き輝く御代に生まれ来て朝に筆を取るわれは

第八一首は、身近に戦死した知り合いでもいたということか。「たたかへるみ国」、つまり戦時下に生きてゐる児童が知ったのは、「人の命の尊さ」だという。作者の児童は高等科二年生。「生きてゆく」ことを考え始めたということか。

第八二首「幸多き輝く御代」とは、連戦連勝の「御代」ということか。この作者も高等科二年生。「朝に夕に筆を取る」ことのできる

「われ」の「幸」を感じている。

83 青葉かげしぼしたたずみきたりきまひるのそらに忠霊塔の歌  
「週報」（情報局編集）第二九一号（昭和十七年五月六日）は、表紙見返りに「国民合唱 忠霊塔の歌」の歌詞と楽譜を掲載した。作詞・百田宗治、作曲・片山頌太郎。同誌面には、「今週と来週、火木土曜日午後七時半より放送」とある。「まひるのそらに」の状況は不明であるが、誰かが歌っていたということか。作品の掲載が、七月五日であり、詠歌し投稿・掲載の時間から推測すれば、発表から間もなく口ずさまれていたということか。

84 荒鷲のとどろくと見れば忽ちに翼きらめき雲に入りたり

89 わが軍は今日も敵機をうち落しわが日の本の名をとどろかす

97 ななたびも感状うけし神鷲の御霊よ護れ南方の空

以上の三作品は、戦闘機にまつわるもの。

第八四首は、児童が「荒鷲」の爆音に気付き、見上げた時には雲間に入っていくところであったということ。

第八九首は、新聞かラジオのニュースで知った戦果ということか。

第九七首「ななたびも感状うけし神鷲」は、五月二十日に戦死した陸軍の単戦闘機隊の隊長・加藤建夫中佐（死後二階級昇進し少将）のこと。「少国民新聞」は、七月二十三日（木・第一八一五号）第一面で「一億の誇り空の軍神」の見出しと「武勳古今に比なし七度・栄えの感状」の見出しを添えて、一面全紙でその武勳を讃えた。

85 つつましく武運を祈り終へし時頭の上に小鳥鳴くなり

86 拍手の一つ一つにはものはもの御身安かれとただ祈るなり

90 全校生の七百人のかしは手は鎮守の森に響き渡れり

92 大いなる朝日を拝し皇軍の武運を祈る青空の下

101 秋風の吹き来る社の内庭で戦地思ひつ我は歌書く



以上の五作品は、出征兵の武運長久を祈るもの。

第九〇首は、神奈川県藤沢市藤高校高二男子の作品。藤高校「全校生の七百人」が一斉に拍手を打ったのか、学年ごとなのか、その様相は明らかではないが、「七百人」が「鎮守の森」で武運長久を祈ったということ。この参拝は、児童の発意ではなく、在籍校の意図の上を実施されたということであり、「学校行事」としての団体参拝ということ。

87 いもほりを昨日しました大きいのが一分隊に出来てゐました

93 戦勝に輝く朝はおのづから鈍ふる腕に力湧きくる

98 わが心わが力をばうち込んで勤勞奉仕けふも終へたり

以上の三作品は、児童の勤勞が内容。

第八七首は、「いもほり」をしたところ「一分隊」の「いも」が出来ていたということ。「一分隊」は、陸軍では一〇名前後の編成であったから、沢山の「いも」が出来ていたことになる。掲載日は七月十二日。作者は東京府の児童であり、詠歌・掲載の時期を推測すると「いも」はジャガイモということか。

第九三首、九七首も仕事内容は不明であるが、九三首は「朝」からの仕事、九八首は一日が終えるまでの仕事であったか。北海道の高等科二年男子も秋田県の五年生女子も、立派な働き手ということ。

88 弁当のおかずをたべつつ思ふかな行列のなかの母の姿を

96 仮名まじり読みにくけれど尊きは老いたる母の慰問文なり

99 ふみの業いよよはげまいたましき教への庭のたよりきくにも

第八八首は、物資統制による配給品の購入の列に並んでいた母を見たということ。

第九六首、「老いたる母の慰問文」が、家族にあてたものかどうかは不明だが、「老いたる母」が慰問文を書いている様子を、児童が見ているということ。

第九九首には、掲載時、「小国、保田両先生の御殉職を拝承して詠める」の詞書が添えられていた。児童の在籍校とゆかりのある「先生」の戦死ということであろう。

95 君が代と一しよに昇る日の御旗朝日をあびてはたはたと鳴る  
式典で、「君が代」斉唱に合わせて掲揚されていく「日の御旗」を見上げている児童がいるということ。掲載日から推測して、直近の、七月八日の大詔奉戴日での光景か。

第三四半期児童は、作品に、子供の遊びや夏の鍛錬の水泳を詠み、流れてくる忠霊塔の歌を聞き、荒鷲に見入った。空の軍神に護りを託し、出征兵の武運長久を祈る全校生徒の一人として児童がいた。勤勞奉仕も児童に期待されたこと。家族のために配給の行列に並ぶ母をよみ、慰問文を書く老いたる母を詠んだ。これらが第三四半期の児童にとっての戦時下ということであった。

一方、第三四半期の「短歌」は、七三首であり、戦時下色を内容とする作品が二二首。残りの五一首は、児童の身の回りの日常を内容とする作品であった。

雨晴れて三日月てらす大川の柳をぬひてほたるとびかふ

(秋田県七日市校五年女子、七月三日・金、第一七九八号)

ぼんぼんとピヤノの音がさえわたり青葉のゆれる夏の夕ぐれ

(北海道札幌市桑園校六年男子、七月三十日・木、第一八二二号)

天の川家のやねより裏山に長くかかりて今日もくれけり

(秋田県七日市校五年女子、同前)

「雨晴れて」は、雨上り、三日月が光を増すころ、飛び交う螢を詠んだもの。梅雨の季節に児童がいるということ。

「ぼんぼんと」と「天の川」は、同日の掲載。共に「夏の夕ぐれ」を詠んだものであるが、前者は、ピアノの響きを耳にする夕ぐれであ

り、後者は、頭上に架かる夏の天の川を目にする夕ぐれである。住まいの違いによる夏の夕ぐれということ。

電線の間張りしくもの巢に露の重たき夏の暁

(神奈川県小淵校高一男子、八月五日・水、第一八二六号)

朝露にぬれてさがれる青草にとんぼ静かにとまりをるなり

(福島県土湯村校六年男子、同前)

「電線の」と「朝露に」は、同日の掲載。神奈川県小淵校の児童も、福島

の児童も、夏の朝露を見ている。夏、児童は朝露とともにあるということと。

裏山に十五夜月のさし来れば桑摘むあかり吹き消しにけり

(新潟県新潟市二葉校高一男子、八月二十三日・日、第一八四二号)

照る月の影の降り来る心地してちらちら光り木の葉散りしく

(北海道札幌市桑園校六年男子、八月二十七日・木、第一八四五号)

「裏山に」は、夕ぐれに手もとを照らして桑の葉を摘んでいたが、十五夜の月が登ってきたので、灯を消したというもの。家業の手伝いであるが、児童は働き者だ。

「照る月の」は、ちらちら散る木の葉に月の光が当たって、光が降ってくるようだとするもの。

月明り、新潟と北海道の季節の違いということか。

庭に出て虫のなく音をききをれば束の空に月昇りけり

(岩手県小山校高一男子、九月十六日・水、第一八六二号)

はれわたる青き空ゆく渡り鳥右手の秋は深みゆくなり

(岩手県赤崎校高一男子、九月二十日・日、第一八六六号)

「庭に出て」は、秋の夕方、虫の音を聞き、昇ってきた月を眺めるということ。

「はれわたる」は、日中、「青き空」に渡り鳥を見つけたということ。

共に、右手の秋の風景の中にあるということ。

昭和十七年第三四半期も、児童は、季節と共に過ごし、詠歌してみせた。

「戦時下における児童文化」について(その二五)

## 五 昭和十七年第四四半期における「短歌」

第四四半期(十月～十二月)に掲載された「短歌」は二八首。

この内、作品内容に「戦時下」色の見えるのは、次の一八首であり、掲載作品に占める掲載率は約六四・三%となる。掲載数が多い一方、戦時下を内容とする作品が多かったということになる。なお、第四四半期に掲載数が多い理由は不明であるが、十月の掲載が四作品のみであり、それ以外には掲載が無かった。

102 シドニーにて散りし四人の軍人我は写真を拝むなりけり

(新潟県中通校高二女子、十月二十八日・水、第一八九七号)

103 神宮のみまへにぬかづき感じたりわれは神の子日本男児と

(東京市中野区上高田校六年男子、十一月六日・金、第一九〇五号)

104 すつきりと晴れ渡りたる秋空に練成会の旗ひるがへるなり

(東京市渋谷笹塚校六年女子、同前)

105 国のため命捧げし忠霊は今日靖国の神と祀らる

(茨城県軽野校高二男子、十一月八日・日、第一九〇七号)

106 ますらをの出で立つ姿雄々しさよ駅頭に見る大和魂

(山形県米沢市松岬校高二女子、十一月十三日・金、第一九一一号)

107 兵士等の出でゆくごとに思ふなりわが身役立つ時はいつかと

(福島県行健校高一男子、同前)

108 教室の地図を仰ぎて皇軍の進みし路を友と指さす

(神奈川県藤沢市藤高校高一男子、同前)

109 秋空に急降下する爆撃機木立の中に消えてゆく昼

(東京市中野区新井校六年男子、十一月二十九日・日、第一九二五号)

110 学校の薪を切りに行かうぞと約束せし朝冷たかりけり

(長野県上村校高一男子、同前)

111 大君に召されし兄は雄々しくも太平洋を乗り越えて行く



112 炭焼きも御国につくす道なりと就職希望に友は言ひけり  
(青森県岩崎校六年女子、十二月四日・金、第一九二九号)

113 大詔をおしいただいて一周年国はいよいよ勝ち進むかも  
(秋田県長木校高一男子、同前)

114 七つの海波涛をけつて日の本の正義の旗をひるがへせ今  
(岩手県盛岡市桜城校六年男子、十二月八日・火、第一九三三号)

115 一億の心ひとしくひきしめて東亜の雲をはらひそめし日  
(栃木県部屋校六年女子、同前)

116 神前に涙こぼしつ必勝を誓ひし朝の雪の白さよ  
(秋田県七日市校五年女子、十二月九日・水、第一九三三号)

117 やり抜くと覚悟をきめし戦争ぞがんばり抜かう我ら子供も  
(岩手県盛岡市桜城校六年男子、同前)

118 ひのみこの生まれ給ひしこのよき日東亜の民よ共に祝はん  
(栃木県部屋校六年女子、同前)

119 ひのみこの生まれ給ひしよき日なり御旗かかげて祝ひまつらん  
(東京市杉並区杉並第八校六年女子、十二月二十三日・水、第一九四五号)

120 シドニーにて散りし四人の軍人我は写真を拝むなりけり  
(東京市杉並区杉並第八校六年女子、同前)

「少国民新聞」は、十月十日(土・第一八八二号)第一面に、「日の丸に包まれて 四英霊今ぞ帰ります」との見出しで、「四英霊」の帰還を報じた。

南蒙のシドニー軍港に突入して、護国の花と散った特別攻撃隊の四勇士、中馬兼四大尉、松尾敬宇大尉、大森猛一等兵曹、都竹正雄二等兵曹の四柱の忠魂は、九日の朝わが日英交換船鎌倉丸で、横浜に無言の凱旋をされました。

この第一面には、鎌倉丸から下船してくる、白い遺骨箱を首からかけた四人を、黙禱で迎える人々の写真を掲載していた。作品にある

「写真」はこれをさすと推測される。

特殊潜航艇によるシドニー攻撃は、五月三十一日に決行され、「少国民新聞」は、六月六日(土・第一七七五号)一面で、特殊潜航艇による「マダガスカル奇襲英国軍艦二隻を撃破」の記事に並んで、「濠洲シドニーでも敵艦一隻撃沈」を報じ、「この攻撃に参加したわが特殊潜航艇中、まだ三隻が帰還しません」と案じていた。

103 神宮のみまへにぬかづき感じたりわれは神の子日本男児と  
「参拝団に加はり皇大神宮におまゐりして」との詞書があるように、伊勢神宮参拝が内容。

「少国民新聞」は、八月十九日(水・第一八三八号)第一面に「伊勢参拝に 今年はいかれます まづ帝都で学童十万人」の記事を掲載していた。

国民学校六年生の伊勢神宮参拝旅行は、去年から、汽車が大変こむので止められてきました。けれども今年は、鍛錬と、国体の精華を身に体するため、伊勢神宮、櫻原神宮、桃山御陵の参拝に限り、特に団体旅行がゆるされることになりました。そこで東京市では、帝都の六年生約十三万六千名のうち、健康やお家の事情などを考へて、約十万人を選び、参宮旅行を行ふことにきまりました。第一回は九月一日から十月六日まで、第二回は十一月一日から十二月中旬まで、各期間内に二千名づつ出発します。午後九時と十時二十五分に東京発の二本の特別列車を毎日仕立て、一千名づつ乗るのです。

作品の掲載が十一月六日であり、作者の児童は、第一回の九月一日から十月六日までの参加であったと推測される。

104 すつきりと晴れ渡りたる秋空に練成会の旗ひるがへるなり

「練成会」は、第十三回明治神宮国民錬成大会のことで、十月二十九日から十一月三日まで開かれた。国民学校生徒の参加した競技もあつ

だから、作者の児童も選手か観客の一人であったか。

105 国のため命捧げし忠霊は今日靖国の神と祀らる

「臨時大祭の日に」の詞書があり、秋の靖国神社臨時大祭のことを詠んだ作品。十月十四日の招魂式に続き十五日からの臨時大祭には、新たに祀られた「一万五千二十一柱の英霊」の遺族三万余名が参列した。「少國民新聞」十月十五日（木・第一八八六号）は、第一面に「昨日の靖国神社」の写真を添えて、「忠魂一万五千二十一柱」の記事を掲載した。作品からは、児童が臨時大祭の遺族の一人であったかどうかは不明であるが、この記事を読んだの詠歌であったか。

106 ますらをの出で立つ姿雄々しさよ駄頭に見る大和魂

107 兵士等の出でゆくことに思ふなりわが身役立つ時はいつかと

111 大君に召されし兄は雄々しくも太平洋を乗り越えて行く

以上の三作品は、出征が内容。何れも、その見送り。

第一〇六首は、駅から入営先に向かう「ますらを」を見送る中に、作者の児童もいたということ。

第一〇七首は、出征見送りを重ねている児童の日常が読み取れる作品。見送る「ことに思ふ」のは、自分の「出征」する日のこと。児童が、常々、言い聞かされてきたことだ。

第一一一首、兄は「太平洋を乗り越えて行く」とあり、海外部隊への出征であったということか。

108 教室の地図を仰ぎて皇軍の進みし路を友と指さす

教室に貼ってある地図には、「皇軍の進みし路」が書き込まれ、書き足されて、その進軍の様子が分かるようになっていくということ。

109 秋空に急降下する爆撃機木立の中に消えてゆく昼

作者が見たのは、急降下訓練をしている「爆撃機」ということだが、

「戦時下における児童文化」について（その二五）

戦闘機ではなく、爆撃機であるとの機種が判別できる近さであったということ。

110 学校の薪を切りに行かうぞと約束せし朝冷たかりけり

「学校の薪を切りに」行くことは、児童の「勤労奉仕」。冷たい朝でも、出かせなければならぬ。

112 炭焼きも御国につくす道なりと就職希望に友は言ひけり

高等科一年生の児童の作品であるが、この友は、同学年ではなく高等科二年生であろうか。それとも、同級生が「就職希望」を語っていたということであろうか。炭焼きは家業であったか。

「週報」第三二二号（昭和十七年九月二十三日）は、「木炭の増産対策」を掲載し、石炭、ガス等の家庭用燃料の供給関係の逼迫と産業、交通部門における木炭の需要が飛躍的に増加しており、木炭の増産のために九月から十一月までを、第一次木炭生産出荷増強期間と定め、計画的な生産と出荷の確保に万全の態勢を整えるための方策を政府が策定したことを知らせ、「一般消費者は、木炭が作られるには、どんなに製炭業者の苦心と精進が注がれてゐるかを思ひ、一片の木炭も心して使われるやう切望してやまない次第であります」と結んだ。つまり、炭焼きは、「御国につくす道」ということだ。

113 大詔をおしいただいて一周年国はいよいよ勝ち進むかも

114 七つの海波濤をけつて日の本の正義の旗をひるがへせ今

115 一億の心ひとしくひきしめて東亜の雲をはらひそめし日

116 神前に涙こぼしつ必勝を誓ひし朝の雪の白さよ

117 やり抜くと覚悟をきめし戦争ぞがんばり抜かう我ら子供も

以上の五作品は、「大東亜戦争一周年記念の作品」として、十二月八日・九日の「私達は誓ふ」の欄に、綴方や詩、書方、図画などと共に掲載された。「私達は誓ふ」の欄は、この二日間のみであり、「私達

の作品室」の転用。

五作品は、岩手県岩手盛岡市桜城校六年男子と栃木県部屋校六年女子が、それぞれ二作品ずつであり、一作品が、秋田県七日市校五年女子。作者の五人の作品が掲載されたのは、この一年間、それぞれ一作品のみ。盛岡市桜城校と栃木県部屋校からの掲載は、この一年間で、この二作品のみであり、掲載の事情が、在籍校への依頼であったかどうかは不明。

118 ひのみこの生まれ給ひしこのよき日東亜の民よ共に祝はん

この二作品は、「皇太子殿下の御誕生日を迎へて」の欄に、綴方、詩、書方作品と共に掲載された。掲載のスタイルは、「祝ひまつらん」の見出しを付して飾り罫で囲まれており、特別の扱いといえる。

二作品は、共に東京市杉並区杉並第八校六年女子の作品。新聞社からの依頼であったか。

第四四半期、児童は、シドニー軍港で戦死した特別攻撃隊の遺骨帰還を、自身が参加した伊勢神宮参拝を、第十三回明治神宮国民錬成大会を、秋の靖国神社臨時大祭のことを、詠んだ。

出征の見送りでは兄を送り、教室の地図では「皇軍の進みし路」を送り、空には爆撃機の急降下を見た。冷たい朝、学校の薪を切りに行くのも児童の「勤勞奉仕」。

第四四半期には、時節柄「大東亜戦争一周年記念の作品」と、「皇太子殿下の御誕生日を迎へて」が掲載された。

一方、第四四半期の「短歌」は、二八作品であり、戦時下色を内容とする作品が一八首。残りの一〇作品が、児童の身の回りの日常を内容とする作品。日常を内容とする作品が、戦時下色を内容とする作品より少ない状況は、十七年第四四半期が初めてのことである。

豊作を祝ふ鎮守の秋祭り今年も村は栄えゆくなり

(新潟県中通校高二女子、十月二日・金、第一八七五号)

澄める月さやかに照らす垣のもとすすきのかげにすだくこほろぎ

(千葉県菊間校高二女子、同前)

天の川流れる街を今日も又よまはりちいさん一人ゆくなり

(秋田県七日市校五年女子、十一月四日・水、第一九〇三号)

朝起きてガラス戸見ればストーブの火かけうつりて光りあるなり

(北海道幌向校五年男子、十一月二十九日・日、第一九二五号)

以上の四作品では、秋から冬へと季節が移っていく。

「豊作を」は、「大東亜戦争一周年」を迎える秋、今年も豊作であり、鎮守へお礼の「秋祭り」。収穫を迎え、村は平和ということ。

「澄める月」は、秋の月が照らす垣根から「こほろぎ」の鳴く音が聞こえて来るといふもので、作者は、月を眺め、鳴く音に耳を傾けている。さやかな月の光と虫の音が、秋の到来を教えてくれる。

「天の川」では、今夜も、夜回りのおじいさんが「火の用心」と声をかけて行く。空を見上げると、天の川が「流れる」ようだ。秋は深まってきた。

「朝起きて」は、作者が起きて見ると、温かそうにストーブが燃えていた。お母さんが点けておいてくれたのだろう。冬が来たということ。

第四四半期、児童は、移りゆく季節と共に歩んでいたということである。

## 六 昭和十七年「短歌」作品の概括

昭和十七年に掲載された「短歌」二七二作品のうち、作品内容に「戦時下」色が見えるのは二一九作品(約四三・八%)。

第一四半期における「短歌」の戦時下は、家族が出征中であり、出征の見送りに、英霊迎えに整列し、戦勝祈願、傷病兵慰問、慰問文作

成であった。

この期、最大の戦果のシンガポール陥落が多くの作品に詠まれ、「皇軍の苦勞」を思いやり、大空の銀翼を頼もしく思い、子供たちは兵隊さんごっこに興じていた。連戦連勝の一方、防空訓練は「実戦」と見立てられた。

第二四半期では、新聞・ラジオニュース・ニュース映画などで見たのか、海鷲・荒鷲の戦闘機や「皇軍」の戦いを、御稜威を、大詔奉戴日を詠み、出征に纏わる内容があった。「銃後奉公」も児童の戦時下であった。

第三四半期では、子供の遊びや夏の鍛錬の水泳を詠み、忠霊塔の歌を聞き、荒鷲に見入った。空の軍神に護りを託し、全校生徒が武運長久を祈った。勤勞奉仕を、配給に並ぶ母を、慰問文を書く老いたる母を詠んだ。自分と母の戦時下ということだ。

第四四半期では、シドニー軍港特別攻撃隊の遺骨帰還を、伊勢神宮参拝を、明治神宮国民錬成大会を、秋の靖国神社臨時大祭のことを、詠んだ。

出征見送りで兄を送り、教室の地図に「皇軍の進みし路」を辿り、空に爆撃機の急降下を見た。冷たい朝、学校の薪を切りにも行った。

この期には、時節柄「大東亜戦争一周年記念の作品」と、「皇太子殿下の御誕生日を迎へて」が掲載された。

この一年、児童は、出征見送り、英霊迎えに整列し、神社に武運長久と戦勝を祈願し、傷病兵の慰問に、戦地への慰問文を書いた。「皇軍」の戦果に喜び、「皇軍」の苦勞を偲んだ。「空の軍神」に「海の英霊」に感謝した。勤勞奉仕で、冷たい朝でも学校で使う薪は自分たちで切りに行った。

「短歌」に詠みこまれた「大東亜戦争一周年」が児童の戦時下であったが、一方、「銃後」にあって、児童は、季節の移ろいを五感で詠み込んでいた。

しかし、この年、昭和十七年では、戦時下色を内容とする作品が、

全作品掲載の約四三・八%を占めており、児童の日常に「戦時」が一層、色濃くなったことの証であった。

(二〇一五・一一・二九)